

國學院大學學術情報リポジトリ

類同と随伴の意味論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 多門, 靖容, Tamon, Yasunori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000718

類同と随伴の意味論

多門靖容

論題「類同と随伴」の後者「随伴」について、進んでは「関与」ということばの方が適切な場合があるが、しばらく「随伴」と置き、論を進める。類同はsimilarity、またresemblanceの意味で用いる。随伴はsimultaneousness、またaccompanimentの意味で用いる。ただ本論では簡明のため、類同の意味をあらわす場合、〈same〉と示し、随伴の意味をあらわす場合、〈with〉と示すことにする。

この稿では、(1) 類同と随伴の片方もしくは両方の意味が関わる現象にはどんなものがあるか、(2) それらの観察を通じ、関連対象語の意味記述上、なにが問題となるのか、を述べる。

I. オナジとイッショはどう違うか

はじめにオナジとイッショの意味はどう違うか、考える。次の用例を見よう。

①太郎は鬼とオナジだ。

②太郎は鬼とイッショだ。

①は比喩の文であり、太郎と鬼に類似性を見ている。含意として、太郎が非情である、勇猛である、何かに強い執着がある等が考えられる(多門2014)。

②も同様に比喩の文と読める。含意は①と同様。ところで、②はもう一つの読みが可能で、それは「太郎が鬼とともに在る」というものである。この読みは、②に時空間を指定する表現を入れると、より明確になる。下③を参照。

③太郎は、昨日から島の洞窟で、鬼とイッショだ。

逆に類似性を捉える領域を指定すれば、類同読みが明確になる。下④を参照。

④太郎は、仕事に関しては、鬼とイッショだ。

以上のイッショの意味をまとめ、オナジと並べ示す。

形式	意味
オナジ	〈+ same〉
イッショ	〈+ same〉 〈+ with〉

Ⅱ. イッショの二つの意味はどういうあらわれ方をするか

前節の④は類同読みの例、③は随伴読みの例としたが、イッショの持つ類同と随伴の意味は、ある文脈でどちらか一方しかあらわれないのだろうか。

理屈としては、類同読みのみ（④例）、随伴読みのみ（③例）の他、類同＋随伴読みの存在を疑うことになる。次の⑤はどうか。

⑤（ゼミ旅行で別行動をとる学生に対し） 皆とイッショに行動をなさい。

⑤は随伴のみの読みもあるかもしれないが、同じ時空間にいて、かつ同じ行動様態であれ、と命じていると読むのが自然かと思われる。随伴と類同、双方の意味があらわれた例としておく。

Ⅲ. 意味のあらわれ方と構文上の位置はどう関係するのか

⑤は「イッショに」が述部に係る副詞句で、二つの意味があらわれている。これを、

⑥皆とイッショの行動をなさい。

のようにイッショを名詞に直接かけると、類同の意味一つに限定される。この観察も承け、以下、（１）副詞句、（２）連体句、（３）述語句の順で、あらわれる意味を整理する。

（１）副詞句

- | | |
|---------------------|---------|
| ⑦あの子達、いつもイッショに居る。 | 随伴読みのみ |
| ⑧（新体操等の練習で）イッショに動け。 | 類同読みのみ |
| ⑤皆とイッショに行動をなさい。 | 随伴＋類同読み |

(2) 連体句

- ⑥ 皆とイッショの行動をなさい。 類同読みのみ
 ⑨ (新築の部屋の造作で) 姉とイッショの部屋にする。 類同読みのみ
 ⑩ (家族旅行で) 姉とイッショの部屋にする。 随伴読みのみ

(3) 述語句

- ③ 太郎は、先週から島の洞窟で、鬼とイッショだ。 随伴読みのみ
 ④ 太郎は、研究に関しては、鬼とイッショだ。 類同読みのみ

以上をまとめると、下のようになる⁽¹⁾。

	〈same〉		〈with〉
副詞句	+	and/or	+
連体句	+	or	+
述語句	+	or	+

IV. イッショの二つの意味はなぜあらわれるのか

イッショの〈same〉の意味と〈with〉の意味は一見かけ離れている。ただ同じ形に担われている以上、意味〈same〉と意味〈with〉の関係を問う必要がある。

これについて、ここでは何かの動機づけによって片方の意味からもう一方の意味が「派生」したとは考えず、二つの意味が出てくる基盤となる、一つ奥の意味があると考える(多門2006)。その奥の意味を、下のようになりたい。

(ア) XがYと、ある [C] において結びついている。

(ア) で、X、Yは対比されるもの、こと、ひと等。[C] は条件を示す。ここではCに入るものの違いで、〈same〉の意味と〈with〉の意味が分岐してくる考える。I 節の②例で説明する。

② 太郎は鬼とイッショだ。

(ア) 太郎が 鬼と ある [C] において結びついている。

(1) 属性 (2) 時空間

上で、Cに(1)属性が入れば〈same〉の意味が、(2)時空間が入れば〈with〉

の意味が成立する。「太郎と鬼」の場合の、その具体を下にまとめる。

- (1) Cが、属性（非情だ、勇猛だ、執着心がある） → 類同 〈same〉
- (2) Cが、特定の時空間（先週から、島の洞窟で） → 随伴 〈with〉

V. この意味記述に問題はないか

イッショの二つの意味の根底に前節（ア）があり、（ア）中のCに入るものの違いで二つの意味が分岐してくると考えた。ところで、この（ア）には、意味のメタ記述についての厄介な問題が存在する。どこが問題かという、（ア）の「(XがYと) 結びついている」という部分である。

「ある属性において結びつく」と「ある時空間において結びつく」の「結びつく」の意味は比喩的（多義的）だと言わざるを得ない。〈same〉と〈with〉の根底の意味を上のように一本で書けるのは、この「結びつく」の多義のおかげである。

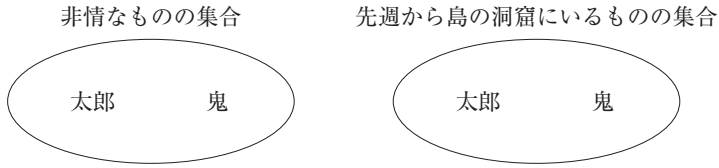
ここには多義語の多義を説明するのに別の多義語を用いている、という問題がある。イッショに即していえば、「同類である」ことと「ともにある」ことをいわば力づくで一本化しているとすると、上の（ア）の記述に価値はあるのだろうか。

これについては、今のところ、次のように考えたい。イッショの具体に即せば、この形式が意味〈same〉と意味〈with〉をなぜ持つのかは考察に値する問いであり、その際、（ア）のような、いわば根底義というべきものの存在が明らかになるのは収穫である。

ただし上で、この根底義は多義語を使って示すしかなかった。これは結局、意味〈same〉と意味〈with〉を束ねる上位のスキーマは設定できるのか、できるとすればどう書くのが適切か、という問題だと言い換えられる。前節（ア）は、この問題の、この稿での仮処理の結果である。この処理と異なるより良い処理があるのか、それともそう書くことにおいてしかスキーマ設定ができないのかは、今後の検討が必要である⁽²⁾。

VI. 対比される二項が存在する世界はどう違うか

イッショの意味〈same〉と意味〈with〉の成立を支える認識の世界を以下に示す。カテゴリの性質から、〈same〉の場合を左、〈with〉の場合を右に示す。



V節(ア)の「結びつく」について、概念世界での結びつきが左で、現実世界での結びつきが右である。

VII. カブルの意味の何が問題か

イッシュォはいったん切り上げ、ここから動詞カブルを取り上げる。カブルの基本的な文型は以下のA、B、Cである。例文とともに示す。

A. Xガ Yニ Zヲ カブル

- ①太郎が 頭に 帽子を かぶる
 ②山が 頂に 雪を かぶる

なお②の二項めを省略した「山が 雪を かぶる」という文はある。また、たとえばある地方をトピックにした談話中、「(その地方は) 山に 雪を かぶっている」という文もありうる。

B. Xガ Yニ カブル

- (写真撮影で) ③前列が 後列に かぶる
 ④太郎の演目が 次郎の演目に かぶる

C. Xト Yガ カブル

- (写真撮影で) ⑤前列と 後列が かぶる
 ⑥太郎の演目と 次郎の演目が かぶる

カブルのもともとの意味はA類にあらわれているが、類同と随伴という点から、ここで扱いたいのはBとCである。BとCの③～⑥の例を考えたい。

③⑤はXとYが重なり空間的に随伴することである。この結果、Yが隠れ視認できないという含意が生じる。これに対し④⑥はXとYが「類似する」という意味が慣習的に成立していると思われる。

ここで問いたいのは、④⑥の意味が③⑤の物理的随伴という意味からの派生だとすると、なぜ随伴〈with〉から類同〈same〉が導かれるか、ということである。

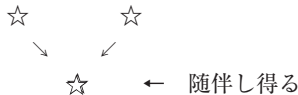
Ⅷ. カブルの「類似する」の意味はどう生まれるか (1)

まず、カブルからいったん離れ、もともと随伴の意味を持ちながら、派生的に類似の意味を獲得していると思われる他の語群を見る。

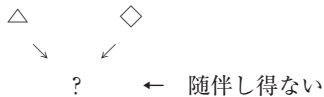
- イ (内容的に) XとYが重なる。
- ロ (内容的に) XとYが合う。
- ハ (内容的に) XとYが一致する。
- ニ (内容的に) ぴったりだ。
- ホ 歌手が別の歌手の曲をカバーする。(名詞として「カバー曲」「カバーアルバム」)

これらの意味派生について、下図を使って説明する。

【A】



【B】



理解のため、二つの対比項を、まずは物理的なものでイメージする。この場合、様態が同じ、または類似しているというのは、形状やサイズがそのようだということである。

重要なのは、図【A】のように形状やサイズが〈same〉であるからこそ、(イ) 重なったり、(ロ) 合ったり、(ハ) 一致したり、(ニ) ぴったりだったり、(ホ) カバーしたり、できるということである。

これに対し図【B】のように、形状もサイズも異なっていると、(イ)～(ホ) は成立しない。つまり、もともと類似しているもの同士だから緊密に随伴できる、緊密に随伴できないものは類似していないという理路である。

(甲) XとYが〈same〉である。→ XとYが〈with〉する。

今は二項を物理的なもので考えたが、作品やテキストその他であらわされるような内容物、非物理的な二項も同様に捉えたい。

- イ (内容的に) XとYが重なる。
- ロ (内容的に) XとYが合う。
- ハ (内容的に) XとYが一致する。
- ニ (内容的に) ぴったりだ。
- ホ 歌手が別の歌手の曲をカバーする。(カバー曲。カバーアルバム。)

重なる、合う、一致する、カバーする等は「XとYが〈with〉する」が原義で、これは上の(甲)の矢印右側、すなわち結果である。「XとYが〈same〉である」は派生義で、これは上の(甲)の矢印左側、すなわち原因である。

(甲)の因果において、もともと結果の意味の方をあらわす形式が、原因の意味を獲得したと見ると、この意味派生は換喩的な動機づけに基づいたものだとはいえる⁽³⁾。

重なる、合う、一致する、カバーする等の例につき「なぜ随伴〈with〉から類似〈same〉が導かれるか」を考え、(甲)説に至ったが、カブルの類似の意味の獲得についても、(甲)説で問題ないのだろうか。

IX. カブルの「類似する」の意味はどう生まれるか(2)

今、(甲)説をもとに、VI節のカブル用例③～⑥を見直してみよう。

- | | | | |
|---------|---------|--------|-----|
| (写真撮影で) | ③前列が | 後列に | かぶる |
| | ④太郎の演目が | 次郎の演目に | かぶる |
| (写真撮影で) | ⑤前列と | 後列が | かぶる |
| | ⑥太郎の演目と | 次郎の演目が | かぶる |

(甲)説は、X、Yが随伴するのはX、Yが似ているから、というもので、対偶的に、XとYが似ていないと随伴しないと言い換えられる。(甲)説をカブルに適用すると、上③や⑤は、XとYが人の列という点で似ていて、それらが重なり合ってYが隠れると捉えられる。

ただ、この考えには無理がある。なるほど用例③⑤ではXとYは似ているが、一般にカブルを用いて事態を把握する場合、XとYが似ていないことはいくらかもある。たとえば写真撮影でXとYが重なってYが見えなくなる時、XとYがまるで似通わない例はいくらでもある。(例。被写体の子猫にレフ板持ちのアシスタントがかぶる)。前々節A類に見られるカブルのもともとの語義からしてもそう

であろう。

このことから、重なる、合う、一致する、カバーする類とカブルは、類同の意味の獲得について、別の説明が用意されるべきである。

ここで、再度③～⑥を見る。③⑤はXがYに随伴してYを隠し、重なって見えなくすることをあらわす。④⑥はXとYが類似しているという意味で、それはXとYに内容的な差異がないということである。この③⑤と④⑥の関係を、もう一度辿りたい。

④⑥は「太郎の演目」と「次郎の演目」に差異がないため、カブラれた側の「次郎の演目」が隠され目立たなくなると考えられる。この点に③⑤とのつながりがあると見るのが自然であろう。以下に示す。

カブルの基本義

XがYに随伴し重なる → XでYが隠される (= Yが目立たない)

↑

XとYに内容的差異がない

カブルの派生義

カブルの基本義 (③⑤用例) と派生義 (④⑥用例) を「XでYが隠される」点でつなぐ説明で、基本義のほうから換喩的に横滑りした意味と派生義のほうから換喩的に横滑りした意味が一致しているという図である。これを下の乙説とする。

(乙) Xが随伴するとYが隠され見えなくなる。

③⑤はXがYに随伴してYを隠し、重なって見えなくする。④⑥はXがYに類似している。「太郎の演目」と「次郎の演目」が類似しているため、カブラれた側の「次郎の演目」は目立たなくなる。結果として「次郎の演目」が隠されたと把握できる。

カブルについては、甲説ではなく乙説が妥当であろう。ただⅢ節で見た問題と同じ問題がここでも浮上する。上のまとめの、意味の結節点にある「隠される」という表現である。基本義から横滑りした「隠される」は具体的、可視的な「隠される」である。しかし派生義から横滑りした「隠される」の意味はどう考えても比喩的である。

意味記述に多義性を持つ表現を使わざるを得ない問題がここにも出現している。イッショの記述同様、これをどう解決するか、あるいはこのままおくしかないことなのかは今後の考察を待たなくてはならない。

X. オモワセルの意味はなにか

ここから別の語例オモワセルを考える。早津（2016）は日本語使役文の理論的・記述的研究として優れたものだが、14章で「XはZをオモワセル」構文を扱っている。そこではオモワセルが使役性を希薄にし判断助辞化していることを明らかにしているが、その判断の特徴として「比喻」と「想起・推定」の二つを認めている。構文面の指摘も併せ、早津（2016）のまとめを記す。

X {物（・事柄）} ハ Z {具体} ヲ オモワセル
X：本義—Z：喩義 ※これを早津（2016）は②類とする。

X {事柄・物} ハ／ガ {Z {事態} ヲ／P {事態} ト} オモワセル
X：根拠⇒Z／P：想起・推定 ※これを早津（2016）は③類とする。

この記述は妥当だと思われるが、なお優れているのは、この②類と③類の関係について早津氏が説く次の部分である。直接引用する。

さて、この③類の「X：根拠⇒Z／P：想起・推定」という関係は、実は②類に連続するものと捉えることができる。すなわち、②類の「X：本義—Z：喩義」という関係は、結局“Xのさす対象がZのさす対象を想起・連想・喚起させたり推定させたりする”という関係を土台にしており、②類はZが具体名詞であることによって比喩性がおもてだってくるのだと思われる。（早津2016. P409－410）

早津氏は構文的特徴を考慮し②類と③類を分けるが、意味的には③類が基本義だと主張する。鋭い指摘だと思う。早津氏のこの主張が適切であることを、かみ砕いて説明する。

まず②類と③類を分ける点から、早津氏の「想起」には類似事物を思いつくような想起は含まれていない。つまりこれは早津（2016）内限定の、狭い意味の「想起」である。

ただ、ふつう想起という語を使う場合、類似事物を思いつくことを排除しないから、その場合も含めた、一般的な想起の意味で以下の説明を進める。また構文的な特徴については早津（2016）に従い、以下では簡明な構文で考える。

[事物・事態] X ハ [事物・事態] Z ヲ オモワセル

上の構文で、ある「[事物・事態] X」が引き金となって、別の「[事物・事態] Z

を想起するという場合、基本的に想起の方向は二つである。平易な表現で述べる。

- (1) 「XはZに似ている！」というもの。(例. X入道雲 Z綿菓子)
 (2) 「XならZだ！」というもの。(例. X入道雲 Z夏の到来)

想起こしの動機として、(1) には二者間の類似性を、(2) には二者間の随伴性を指摘できる。早津 (2016) の整理との対応では、

- (1) 比喻 (早津②類)
 (2) 想起・推定 (早津③類)

である。ここにおいて、(1) が類同の意味、(2) が随伴の意味にあたることは明らかである。イッショ、カブルと同様、オモワセルもこの二つを担っているのである。

ただ、急ぎ付け加えると、オモワセルにはイッショと異なる点がある。オモワセルはある文脈で類同か随伴かどちらかの意味であらわれる。イッショのように、二つの意味が同時に顕現する例 (Ⅱ節例文⑤) はない。この点はカブルも同様である。

もう一点検討しておくべきことがある。イッショの随伴は同一時空間的随伴であったが、オモワセルはどうだろうか。例として早津 (2016) の挙げる (2) の (X、Z) を検討してみる。早津氏の収集された早津③類例を二群 (以下「①②③～」と示すものと「イロハ～」と示すもの) に分けて考える。

- ①大霜、長い長い山国の冬が次第に**近づいた**コト
- ②空模様、梅雨の季節が**近い**コト
- ③奉行の視察、御一行の**近づいた**コト
- ④強い光、初夏が**来た**コト
- ⑤青空、春が**近い**コト
- ⑥竹の葉にそそぐ音、山里へ冬が**やって来る**コト
- ⑦蕭条とした日、十一月が**近づいた**コト
- ⑧役人衆の通行の連続、**雲行きが急な**コト
- ⑨歎呼の声、東照宮の偉業が内部から崩れかけて行く**時がやって来た**コト
- ⑩フロイトがゲーテ賞を受けたコト、彼の学説への憎悪の**衰退を告げる**現象
- ⑪ある忌まわしい予感、一生の危機が**近づいた**コト
- ⑫無表情にパンチを振る姿、相手を半殺しの目に合わせてしまうのではないかと
いうコト
- ⑬ざわめき、大関横綱級の力士の**登場**

- ⑭ 温かい朝、春の到来
- ⑮ 寒い日、冬のおとずれ
- ⑯ 寒い晩、翌朝の霜の烈しさ
- ⑰ 構内の様子、さっきの押しあいへしあいがどんなものであったか
- ⑱ 表情や態度、昔の乱暴者だった頃
- ⑲ 榆病院の法被を着た職人たち、火災まえ（の榆病院の勢力）
- ⑳ 寒い寂しい雨、冬の名残

まず上の①～⑳を見る。(X、Z)のZには、ゴシックおよび下線で示した表現が見られる。ゴシックはZの事態がいわば〈到来〉的なものであることをあらわし、事態Xが事態Z成立の認定根拠となっている。XはZの先がけ、予兆である。

次に下線はZの事態が時間的に遡って想起されるものであることをあらわしている。想起の引き金となるXは現前している。㉔でZの方に「名残」という表現が見られるが、⑰⑱⑲⑳において過去事態Zの名残（現前に認められるもの）は実はXの方である。

このように、上20例は空間的には概ね同じ、時間的には同時もしくは近接した時間内（過去へ向かうのも未来へ向かうのも可）でのXとZの随伴が読み取れる。やや特徴的なのは⑱⑲で、これはZがそう近接していない、時間が飛んだ過去の事態である⁽⁴⁾。

上①～㉔のゴシック・下線表現付きのオモワセル群を見ると、イッショの随伴が同一時空間内であるのに対し、オモワセルの随伴はそれだけでなく、時間的にずらしたものも許容されることがわかる。次にゴシック・下線表現のない用例を見てみよう。

- イ. 尊大な答え方、なみな人間ではないコト
- ロ. 封筒の様子、紙幣は入っていないコト
- ハ. 快活な話しぶり、たしかに面白い人であるコト
- ニ. 論理に明るい頭脳を持ちながら友情にもすなおに優しいコト、温かい家庭の団欒
- ホ. 瞑想には条件がないコト、瞑想は天与のものであるコト
- ヘ. 涼しい夏の夜の空気、祭の夜以上の楽しさ
- ト. 初夏の一日、夏
- チ. 行儀の良い前垂を掛けた膝、橋本の家風
- リ. 雨の季節、川の氾濫
- (ヌ) 舞台上の子役、息子との長い別れ
- (ル) 梯子のような渡り廊下、中世の城の攻防戦
- ヲ. 娘らしい手、女のさかり

- ワ. 理智的で蒼白い顔、法の威厳
- カ. 岬の山のでっぺんがかすかにゆれうごいているようなの、外海の波のあらし
- ヨ. 臉から鼻の両側へかけて赤らんでいるの、雪国の夜の冷たさ
- タ. 執達吏・高利貸・古道具屋といった言葉、生活のみじめさ
- レ. 煙草の煙を吐き出す勢い、若々しい肺の広さ
- ソ. 漢詩の完成度、作者の才の非凡
- ツ. 川向うの煙、その下で燃やされる物の大きな量
- ネ. 目指す病院の屋根が見えながらいくら歩いても近くならないコト、私を取り巻く原の広さ

上の20例のうち、ヌ、ルは補完解釈が要るが、早津氏の②類（比喩）と思われる例であるため、残りの18例を検討する。これらは先の①～②0群のようなゴシック・下線表現がなく、XとZの二つの事態は同時的である。Xを引き金に、過去や未来の事態を想起しているとは見えない。

次に空間的にはどうか、という観察に入りたいところだが、上の群について、この観察に意味があるか、判断が難しい。イ、ロ、ハ、ト、ヲ、カ、ヨ、レ、ツ、ネの例は同一空間内の二事態と把握できそうだが、それ以外のものの認定については「同一空間」の定義に拠るからである。

この認定のしづらさにも関わるが、重要なのは、上の群にXとZが物理的可視的な事象同士のもの他、推論の過程を経て関与づけられた二項が多いことである。その推論の具体として、ZがXの根拠となっているものが多い、ということがある。

[X→Z] という順序に合わせて書くと、因果関係が、[果→因] という順序で表現されているものが多いのである。可視的なものも含めて、例としては、イ、ロ、ハ、ニ、ホ、チ、ヲ、ワ、カ、ヨ、タ、レ、ソ、ツ、ネ、がそうである。こういう関係を見ると、X、Zを単に〈随伴〉の関係とするだけでいいか、検討の余地が出てくる。

XI. 随伴が関与か

前節まで早津（2016）の③類を見た。前節途中までは〈随伴〉という用語を使い考察を進めてきたが、あらためてX、Zの関係を考えたい。

早津③類後半の、イ～ネの「XならZだ」は、推論過程を経て関与づけられた二項が多く、特に因果関係が、[果→因] の順で表現されているものが多かった。あらためて見てみると、この点はイ～ネの前に見た①～②0も同様で、こちらはほとんどが「果→因」と判断しても差し支えない例である。

こうなると、①～②0とイ～ネを併せ、あくまで〈随伴〉という語を使うのなら、

「ある観点からするXとZの随伴」の認めとでも言うしかない。ゴシック付きの随伴は同一時空間での物理的随伴の意味とは乖離しており、ここにもまたメタ言語が多義的（比喩的）にならざるを得ないという問題が浮上する。そして「ある観点からするXとZの随伴」とは、通常用語を使えば、XとZが「関与」しているというのが適切かと思われる。

ここで、前半の①～②⑩のような時空間的随伴がはっきりしているものも、関与の一種ではあるから、非時空間的随伴も併せ、早津（2016）の③類（前節（2）類）は、関与性をあらわすもの、比喩の用語を使えば換喩的認識をあらわすものと言うのが適当であるかと思われる⁽⁵⁾。

このように考えると、オモワセルの想起の特徴として、（1）隠喩的、（2）換喩的という整理ができる。ただ（1）は早津（2016）が指摘するように、隠喩表現（～オモワセルを比喩指標と取れば直喩表現）そのものだが、（2）の諸例は換喩表現とは見なせない。（2）を「換喩」という場合、それは表現自体ではなく説明原理である。ある一続きのシナリオ上で、事物（事態）Xと事物（事態）Zが、お互いに関与し合っていると認めることを換喩的想起と呼びたい。

以上から、早津（2016）の取り上げたオモワセルは、（1）隠喩的想起、（2）換喩的想起、を併せ持った形式であると総括できる。

XII. まとめ

ここまで、オナジとイッショはどう違うか、イッショの二つの意味はどう関係するか、カブルの類似の意味はどう出てくるのか、オモワセルの意味はなにか、を論じ、類同と随伴（関与）の接点の問題を考えた。

オナジは類同の意味、イッショは類同と随伴の意味を持つ。類同と随伴の意味は「XがYとある（C）において結びついてる」のCに、属性が入るか時空間が入るかによって分岐する。

カブルの類似の意味は、重なる、合う、一致する、カバーする、ぴったりだ等の意味派生と異なり、「Xが随伴するとYが隠され見えなくなる」ことから得られる。

オモワセルの想起は、類似事物の想起と随伴事物の想起に向かうが、観察の結果、後者は単に随伴とするより、関与とする方が適切である。この点でオモワセルは（1）隠喩的想起、（2）換喩的想起をあらわす形式である。

これらの考察の結果、イッショで出現した「結びつく」、カブルで出現した「隠される」、オモワセルで一時使用した「随伴」という用語が多義的であり、意味記述上、注意を要することが明らかとなった。

オモワセルの「随伴」については「関与」の方が適切であると結論づけたが、「結びつく」「隠される」については問題を保留した。二者のうち、特に前者「結

びつく」については、類同と随伴を束ねる上位のスキーマは設定できるのか、できるとすればどう書くのが適切か、という問題に言い換えられ、その考察はきわめて抽象的な領域に入るものの、今後取り組むべき興味深い課題だと思われる。

注

- (1) 一点付け加えると「イッショにする」という表現が問題になる。この表現は構成的には、副詞句「イッショに」＋述語句「する」で、係助詞ハを挿入して「イッショにハする」という表現が可能である。しかし内容的には「イッショにする」で一語相当と捉えたい表現でもある。その場合、次の⑪の類の解釈が問題になる。

⑪液体Xと液体Yを「イッショにする」。

- XとYを混ぜ合わせる事態を⑪のように言うとする。随伴〈with〉させた結果、類同〈same〉物になるという解釈が可能だとすると、随伴＋類同読みと認められる例である。
- (2) なお漢語「一緒」の「緒」は、白川 (1996) によれば、もともと「糸口、糸の末端、糸の結びどめのところ」の意であるという。これに基づき (ア) を作ったわけではないが、(ア) を記した後、白川 (1996) で確認した。
- (3) 「XとYの内容がズレル」という。「(内容が) 重なる、合う」等と反対に、〈same〉ではないという意味がある。だが、加えてもう一つ、同内容ではないことは前提として、内容的なかみ合わせが悪い (一貫性が低い) という意味にも使われる。ぴったり随伴しないこと (= 非随伴) からの、この二つめの意味派生の筋を考える必要がある。
- (4) ⑮⑯例とは逆に、未来方向にZを飛ばす例はあり得る。たとえば次である。

X		Z
大人顔負けの賢さと健全な向上心	ガ 成人後の大成	ヲ 思わせる。

この例は⑮⑯と同様、Xは現前しているがZは非在のものである。しかし⑮⑯とは逆に、想起の引き金Xから未来の事態Zを創作している。

- (5) 比喩研究者で、換喩を「関与性に基づく」と言い切る者はおらず、多くの研究者は「近接性」という用語を好む。最近では換喩を規定する際、近接性 (に基づく) のあとに「または関与性 (に基づく)」と書き足す研究者もいるが、本質的な規定の方を付録で付け足すのはどうかと思う。(もちろん「近接性」だけで済ますのに比べれば良いが)。「近接性」は「関与性」に包含されるため、換喩の規定は「関与性 (に基づく)」で良いと思われる。これは単に用語の指すところの幅の問題ではなく、換喩の本質に関わる事柄である。詳しくは『日本語学大辞典』(東京堂出版) の「比喩」の項を参照されたい。

参考文献

- 白川 静 (1996) 『字通』平凡社
 多門 靖容 (2006) 『比喩表現論』風間書房
 多門 靖容 (2014) 『比喩論』風間書房
 日本語学会編 (2018) 『日本語学大辞典』東京堂出版
 早津恵美子 (2013) 「『感じさせる』『思わせる』の使役動詞性の希薄化」『日本語学・日本語教育』

早津恵美子（2016）『現代日本語の使役文』ひつじ書房（14章「『感じさせる』『思わせる』の判断助辞への近づき」は早津（2013）に基づく）。

追記

イッショの類同の意味に関し、査読でコメントをいただいた。辞書を中心に根拠を挙げ、イッショの類同の意味が西日本方言由来であるという指摘であった。私にはイッショの共通語使用における内省しかなかったので、指摘は為になった。丁寧なコメントをくださった査読委員の先生に御礼を申し上げたい。

本稿X節は、早津（2016）14章に対する、早津恵美子先生（名古屋外国語大学）への私信が基となっている。それまでその意味の面白さを知らないでいた語について、考える機会を与えてくださった早津先生に感謝申し上げたい。

最後に、類同、随伴等の用語、その英語への言い換えに関し、長谷部亜子先生（愛知学院大学非常勤講師）からコメントをいただき、指摘のいくつかを活かした。長谷部先生にも感謝申し上げたい。